



お江戸の百太郎

那須正幹作 長野ヒデ子画
岩崎書店 1986年

江戸の、とある長屋に大仏の千次という岡っ引きと息子の百太郎が住んでいました。この千次親分、体はでかくて人はいいけど捕り物の腕はさっぱり。その分、息子の百太郎が大人顔まけの知恵と名推理で、父親に代わって大活躍。ゆうかい事件やゆうれい騒動など難事件を次々に解決していきます。千次親子の痛快捕り物帳「百太郎シリーズ」の第1弾。悪党を追いかけて江戸の町を百太郎といっしょに走りまわっているような気分が味わえます。このシリーズは、他に「お江戸の百太郎 赤猫がおどる」など、全部で6巻あります。



おすのつぼにすんでいた おばあさん

ルーマー・ゴッデン文
なかがわちひろ訳・絵
徳間書店 2001年(付 1972)

みずうみのほとりのつぼの形をした家に、おばあさんが猫と暮らしていました。食事や家具はつましいけれど、家の中はほこり一つありません。ある日おばあさんは漁師から小さな魚を買いますが、可哀そうになって逃がしてやります。ところが、それは魚の王様だったので。王様はお礼になんでものぞみをかなえてあげようと言うのですが…。欲張りをいませめた有名な昔話をもとにしていますが、一味ちがった心温まるお話になっています。



I.B.シンガー作 工藤幸雄訳
 マーゴット・ツェマックさし絵
 岩波書店 1981年(7月) (1973)

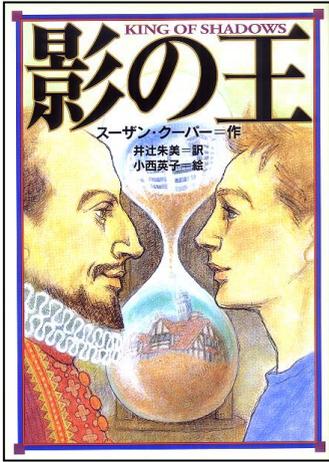
幼い頃からお話好きだったナフタリは、成長してから愛馬スウスと共に町や村を回り、子どもたちにお話を伝える人となります。この主人公の姿はまさに作者の理想像です。作者はユダヤ教のラビの子として生まれ、幼い頃から、家に訪れる人々の相談事を聞きながら育ちました。そんな作者の子ども時代のお話や、ユダヤに伝わる不思議なお話、こっけいなお話の取り合わせが、笑いと悲しみの混じり合った不思議な世界を作り出しています。



おれがあいつであいつがおれて
 山中 恒
 理論社 1998年
 〈旺文社 1980年〉

一夫の小学校に、一美という女の子が転校してきました。幼なじみだったため、クラス中に昔のことをばらされてしまいます。帰り道、し返しのつもりで一美に体当たりをくらわせる一夫。頭を打った拍子に、心と体が入れかわってしまいます。それからというもの、口の聞き方から仕草まで、2人とも苦労の連続。一夫は、スカートの中を風が通りぬけるのを感じるように、女の子の気持ちを理解していきます。2人は元にもどれるのでしょうか？

お話を運んだ馬



スーザン・クーパー作 井辻朱美訳
小西英子絵
偕成社 2002年(7月) (アメリカ1999)

グローブ座でシェイクスピア劇に出演することになった少年ナットは、ある朝目覚めると喧噪に満ちた16世紀のロンドンにいました。当時のグローブ座でシェイクスピアと出会い、共演し、そして別れが訪れ…。現代との習慣の違いに戸惑いつつも、ナットは演じる喜びを感じ、自分自身を見だしていきます。実はナットのタイムスリップには、深い謎が隠されていたのです。時を越えて存在するグローブ座が、すべてを包み込んでいるようです。



くまのプーさん

A・A・ミルン作 石井桃子訳
E・H・シェパード絵
岩波書店 1957年(11月) (1926)

ぬいぐるみのくまのプーさんは、食いしん坊で詩人で「ばっかなクマのやつ！」ですが、小さな男の子ロビンのお気に入りです。風船につかまって、木上の蜂蜜を取りにいったミツバチに追いかけられたり、お客にいったウサギの家で食べ過ぎて入口に詰ったり…。魔法の森を舞台にプーさんとぬいぐるみの動物たちがくりひろげる楽しいお話です。本人は大真面目なのに、なぜかとてもおかしくて、ゆったりと温かな気持ちが伝わってきます。続編の「プー横町にたった家」のほか1話ずつを絵本にした本も出ています。

影の王



いぬいとみこ作

吉井 忠絵

福音館書店 1967年

ゆりの父は子どものころ、英国人から小人たちを預かります。コップ1杯のミルクが小人たちの生きる糧でした。時がたち、ミルクを運ぶのは子どもたちの仕事になりました。未っ子のゆりに番がまわって来たころ、戦争が激しくなり、ゆりは小人たちを連れて疎開します。食糧難の中、なんとかミルクを手に入れようとするゆり。外の世界の異変におびえながらも自立しようとする小人たち。暗い時代に愛する者をひたむきに守り続けた少女の姿が感動的です。続編に「くらやみの谷の小人たち」があります。



コーンウォールの聖杯

スーザン・クーパー作 武内孝夫訳

マージェリー・ギル挿絵

学習研究社 1972年(7月) 1965)

ドルウ家の3兄妹は、両親とコーンウォールの古い屋敷を借りて夏休みを過ごすことになりました。到着早々、雨に降りこめられて探検をはじめた3人は、屋根裏で古文書を見つけます。同時にこの家の周りには怪しい動きが…。3人は否応なく危険な冒険に巻き込まれます。アーサー王と、キリストの聖杯伝説をめぐる、謎解きとスリルに満ちた読みごたえのある冒険物語です。頼もしい老教授と、対立する黒衣の男の謎が残されますが、その謎は、その後、「闇の戦い」(評論社)シリーズ(全4巻)に受け継がれ、より深いファンタジー物語として、新たな展開を見せます。

木かげの家の小人たち



さすらいの孤児ラスムス

リンドグレン作 尾崎 義訳
岩波書店 1965年（スウェーデン1956）

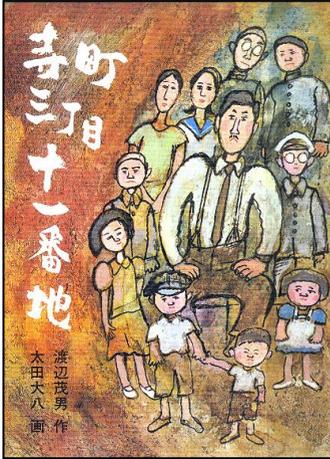
ラスムスは小さい時から孤児院で育ちました。いつか優しいお金持ちに引き取られたいと思っていますが、努力しても裏目に出るばかり。そこでラスムスは、自分で里親を見つけに行こうと孤児院を脱走します。風来坊のオスカルおじさんと知り合い、気ままな旅を楽しんでいましたが、とんでもない事件に出くわします。命を狙われるようになった2人の運命は…。ラスムスの活躍にハラハラドキドキし、あたたかなラストに思わず涙の傑作です。



山賊のむすめローニャ

アストリッド・リンドグレン作
大塚勇三訳 イロン・ヴィークランド挿絵
岩波書店 1982年（スウェーデン1981）

森の中の城で生まれた山賊の娘ローニャは、森の素晴らしさ、厳しさを学びながら、森の中で賢くたくましく育ちます。森で気をつけなければならないのは、荒っぽい鳥女と灰色小人と、もう1派の山賊でした。そんなある日、男の子と出会います。宿敵の山賊の息子でした。2人は親の目を盗んで親しくなりますが…。山賊の子という宿命に負けず、現実をみつめ、成長する2人。リンドグレンの多彩な作品の中でも一味違う魅力があります。



寺町三丁目十一番地

渡辺茂男作 太田大八画
福音館書店 1969年

写真館の福っつあんは、ある日、朝礼の時間に馬に乗って小学校にやってきました。そんな父親が、仁は恥ずかしくてたまりません。でも、福っつあんは子だくさんの家族を腕一本で養い、子どもたちを真っすぐに育てることに誇りを持つ、ちょっと頑固だけれど立派な父親です。昭和初期の庶民の生活と子どもたちの遊びがいきいきと再現されていて、魅力たっぷり。時代は古くても決して古臭くない、日常を描きながら充分感動的なお話です。



時の旅人

アリソン・アトリー作 (作) 訳 1939)
評論社 1980年 小野 章訳
岩波書店 1998年 松野正子訳

サッカーズ農園にやってきたペネロピーは、ある日、時間の壁を越えて16世紀の農園へ入り込みます。先祖にあたるおばさんが働くこの館の領主バビントンは、幽閉中のスコットランドのメアリー女王救出計画に加わっていました。過去と現在を行き来することができるペネロピーには、女王や領主の運命はよくわかっています。昔の人と心を通わせながらも救うことができない少女の悲しみ…。舞台となった美しい農園は今も存在しています。



ドリトル先生アフリカゆき

ヒュー・ロフティング作・絵 井伏鱒二訳
岩波書店 1961年(仔) 1920)

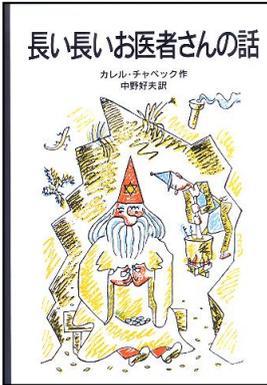
医者ドリトル先生は、飼っているオウム、ポリネシアに動物の言葉を習い、とうとう動物のお医者さんになってしまいます。先生はしっかり者のあひるのダブダブ、鼻利きの犬のジップ、食いしん坊の豚のガブガブなど、沢山の動物と助け合って、家族のように、楽しく暮していました。ある日ツバメに、アフリカの猿の間に疫病が出たので、助けて欲しいと頼まれます。早速出かけた先生一行は…。先生と仲間との生き生きとした交流が話の奇抜な展開と相まった楽しい物語です。「ドリトル先生」シリーズは全12巻あります。



トンデモネズミ大活躍

ポール・ギャリコ作 矢川澄子訳
J. & A. グレアム=ジョンストン絵
岩波書店 1970年(仔) 1968)

陶芸職人が偶然作ってしまった尻尾のない奇妙なトンデモネズミ。時計が真夜中の13を打つと命を得て、家をぬけだしました。怖いということを知らないネズミは、おぼけのドロロンにおどかされても平気。無邪気に進んでいきます。でも、みんなに自分がトンデモネコの餌食になるサダメだと聞かされ…。勇敢にもネコに会いにマン島に出かけたトンデモネズミの運命は？ 軽快な文章の中から、深く、暖かいメッセージが伝わってきます。



長い長いお医者さんの話

チャベック童話集

カレル・チャベック作 中野好夫訳

ヨセフ・チャベック絵

岩波書店 1962年(初刊1931)

おもしろおかしく読める話だけがユーモアのある童話ではありません。上質なものには時代が感じられ、世間を風刺する場面もあって、おもわず微笑んでしまうユーモアがあります。この本は、まさにそういう話の宝庫といっていでしょう。梅の実をのどにつまらせた魔法使いが、医者にからかわれる表題作や、世界中のカップが集り、ニュースを報告し合う「カップの話」など全部で9編。爽快な読後感とともに忘れられない1冊になるでしょう。



西の魔女が死んだ

梨木香歩

小学館 1996年

新潮社文庫 2001年

〈楡出版 1994年〉

少女には「西の魔女」と呼んで慕っているイギリス人の祖母がいます。日本人の夫の死後も日本の田舎にとどまり、ひとり暮らしを続ける祖母はちょっとお茶目で底知れない魅力の持ち主。登校拒否の少女はそんな祖母との暮らしに居場所を求めます。庭の草木のように確かな暮らしを楽しみ、交わす会話に心を癒され、少女は前に進む力を蓄えていきました。「西の魔女」最期のメッセージが、少女を温かく包み込み、静かな感動をよびます。



人間になりたがった猫

ロイド・アリグザンダー作 神宮輝夫訳
評論社 1977年(7月) (1973)

猫のライオネルは、飼い主である大魔法使いにたのみ込んで人間の若者の姿に変えてもらいます。そして物見遊山のつもりでブライトフォードの町に行きましたが、そこでは悪徳町長が町を牛耳っていました。ライオネルは否応なく町長と住民との争いに巻き込まれ、元猫の特技を使って大活躍。しかし、争いや恋を知るうちにライオネルは…。テンポの速いストーリーのうちに、人間は何によって人間となるのかを気付かせてくれるお話です。



ぬすまれた宝物

ウィリアム・スタイク作 金子メロン訳
評論社 1977年(7月) (1973)

王室の宝物殿から宝物が盗まれるという大事件が起こりました。鍵を持っているのはクマのバジル王と、見張り役主任のがちょうのガーウェインだけです。王さまの信頼あついガーウェインだったのに、いつしか王さまにも友人にも疑われるようになります。まちがった判決を下してしまう王さま。盗んでいるつもりはなかった真犯人。人それぞれの心の動きがみごとにとらえられたお話です。作者の描いた挿絵も物語を味わい深くしています。



ねこじゃらしの野原

安房直子作

講談社 1984年

谷あいの町のとうふ屋さんに4月10日の朝早く、へんなお客が訪れます。かん高い「おはようございます」の声に起こされて、見ると店の前にはずらりと並んだすすめたち。すすめ小学校の入学式のお祝い用にとうふを1丁こしらえてほしいというのです。とうふ屋さんとなすすめたちとのやりとりが楽しい「すすめのおくりもの」他、とうふ屋さんをめぐる詩情豊かなファンタジーが6編。やさしく、繊細で美しい世界が展開する素適な1冊です。

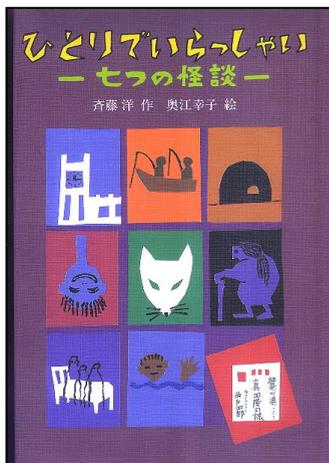


歯みがき つくって 億万長者

ジーン・メリル作 岡本さゆり訳

偕成社 1997年 (7月) 1972

転校先の学校でケイトが出会ったルーファスは気さくで誠実、その上、抜群のアイデアと実行力の持ち主でした。ある日、彼はドラッグストアの歯みがきが79セントもするなんて高すぎると言い出して、手づくり歯みがきを売り出します。材料費はたったの2セント! 3セントで売ってもうけは1セントあります。同級生や先生までも巻き込んだ歯みがきビジネスは大成功。経済のしくみもわかるし、算数も勉強できちゃう楽しい本です。

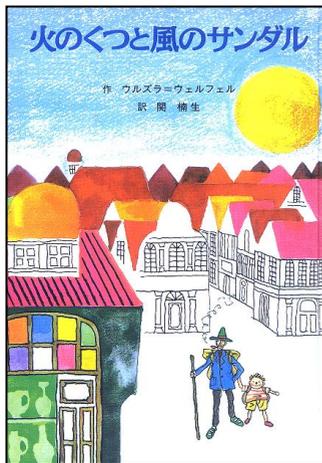


ひとりでいらっしやい

—七つの怪談—

斉藤 洋作 奥江幸子絵
偕成社 1994年

夏休み、兄の通う大学にやってきた小学生の隆司は、偶然、ある研究室にたどり着きます。そこでは「怪談クラブ」という会が開かれていて、メンバーが次々と怪談を語っていました。幽霊や妖怪が大好きな隆司は勧められるまま仲間に入り、みんなに続いて「むらさきばばあ」の話します。語られる話はどれも、身の回りではほんとうに起こりそうで、背中がぞくぞくすること請け合い。最後の落ちがまた怖い。怖い話の好きな子にぴったりです。



火のくつと風のサンダル

ウルズラ=ウェルフェル作 関 楠生訳
童話館出版 1997年(ドイツ1961)
<学習研究社 1966年>

いじめられっ子のチムが誕生日に両親からもらったプレゼントは、お父さんと一緒に旅をするというものでした。旅の間、チムは「火のくつ」、父親は「風のサンダル」という名で呼びあうことにします。大きな牛に会ったり、手摺のない橋を渡ったり、大人には何気ないできごとが、チムには大冒険です。チムはこの徒歩旅行で、大きく成長しました。もういじめられっ子ではありません。旅の途中で、父親が語るエピソードも楽しめます。



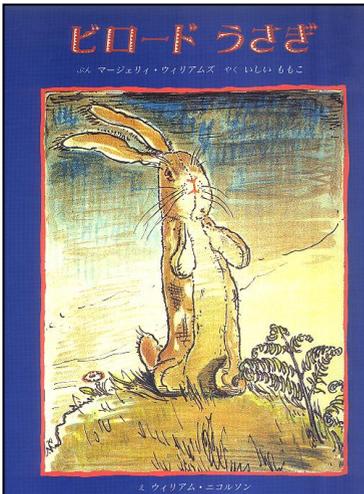
百まいのきもの

エリノア・エステーズ文 石井桃子訳

ルイス・スロボドキン絵

岩波書店 1954年(7刷)1944)

マディーは、友だちがワンダをいじめるのを見ていて嫌だと思っているのに、それをやめさせることができません。百枚も服を持っていると嘘をつくワンダが悪いのだと、言いわけをしてみますが、ほんとうは、つぎに自分がいじめられるのが怖かったのです。その後ワンダが描いたドレスの絵が入選し、ワンダの嘘の意味を知ったマディーは、彼女に謝ろうと思いつつのですが…。いじめた側の少女の揺れる心が時代を越えて伝わってきます。



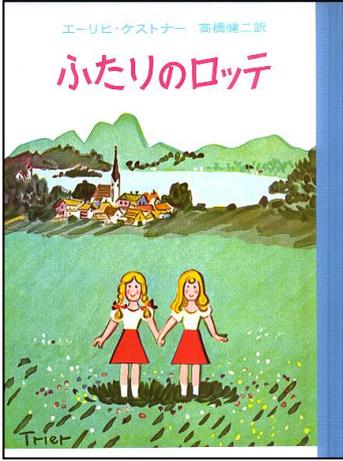
ピロード うさぎ

マージェリア・ウィリアムズ文 石井桃子訳

ウィリアム・ニコルソン絵

童話館出版 2002年(1刷)1922)

あるクリスマス、ピロードでできたうさぎは坊やのおもちゃの仲間入りをしました。最新式のおもちゃの間で気おくれしていると、親切な馬が子ども部屋におこる魔法のことを教えてくれます。心からかわいがられたおもちゃは「ほんとうのものになるのだ」というのです。それを願うピロードうさぎ。坊やから引き離され、悲しんでいたその時…。80年前に書かれたお話ですが、今も強く子どもの心を惹くでしょう。「岩波の子どもの本」から50年、同じ記者の新訳で出版されました。



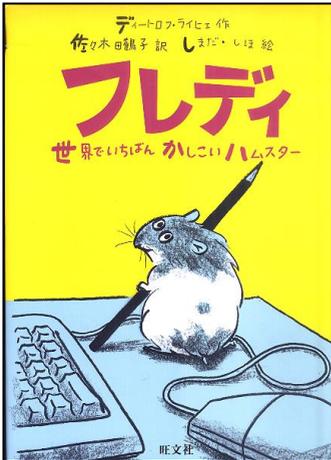
ふたりのロッチェ

エーリヒ・ケストナー作 高橋健二訳

W・トリヤー絵

岩波書店 1962年（ドイツ1949）

別々の土地で育ったルイーゼとロッチェは、ある夏ぐうぜん出会います。2人は生まれた場所も誕生日も、そして顔も全く同じ。なんとふたごだったのです。父と暮らすルイーゼと母と暮らすロッチェ。2人は離婚した両親をもう1度一緒にさせるため入れ替わりますが…。性格も好みも得意な事も全く違うのにうまくいくのでしょうか？ ウィットに富んだ読みやすい文章。奮闘するおしゃまなふたごの活躍にドキドキしながら一気に読めるお話です。



フレディ

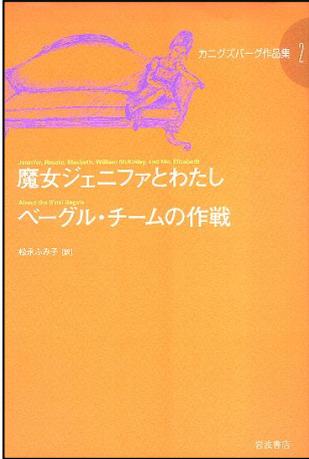
世界でいちばんかっこいいハムスター

ディートロフ・ライヒェ作 佐々木田鶴子訳

しまだ・しほ絵

旺文社 2002年（ドイツ1998）

ペットショップ暮らしに疑問を持ったハムスターのフレディは、そこから抜け出すために早く飼い主を見つけようと努力します。その甲斐あって優しいソフィーに飼われるようになり、かこの戸を開ける方法や文字も覚えめました。ところがソフィーの母親がアレルギーのせいで預けられたジョンの家には、猫とふざけ屋のモルモット2匹がいました。やっと彼らとも友情を育み、ジョンとも意志を通じる方法を見つけて自立への道を歩み始めます。「フレディ」のシリーズは5冊あります。



ベーグル・チームの作戦

カニグズバーク作品集第二巻

E.L.カニグズバーク作・絵 松永ふみ子訳
岩波書店 2002年(7月)カ1969)

12歳のマークの悩みは尽きません。ママがマークの野球チームの監督になってチームでの立場が微妙になるし、親友は離れていくし、Hな雑誌も気になるし…。それにユダヤ教の成人式パーミツバの準備もしなければ！ そんな問題を一つ一つ自分で考えて解決していくうち、いつしかマークは大人への扉を少しずつ開けていきます。見ていないようでいてポイントをしっかり抑えている家族との、ユーモアあふれるやりとりが絶妙です。なお、この作品は「ロールパン・チームの作戦」(岩波書店1974年)を改題したものです。



ペニーの日記読んじゃダメ

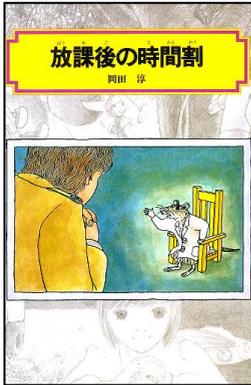
ロビン・クライン作 安藤紀子訳

アン・ジェイムズ絵

偕成社 1997年(オーストラリア1983)

〈佑学社 1993年〉

10歳の少女ペニーは学校の授業でいやいや老人ホームに慰問に行きますが、さぼって裏庭に。そこには子供の歌なんてごめんだね、というベタニーさんというおばあちゃんがいきました。年寄りなんて大嫌いなペニーでしたが、このお年寄りはちょっと違いました。ベタニーさんと友達になって昔の話を聞くうち、何かしてあげたいと思うようになったペニーは一つの計画を…。ゆかいな写真やイラストがいっぱいな本の作りもユニークです。続編に「ペニーの手紙『みんな、元気?』」があります。

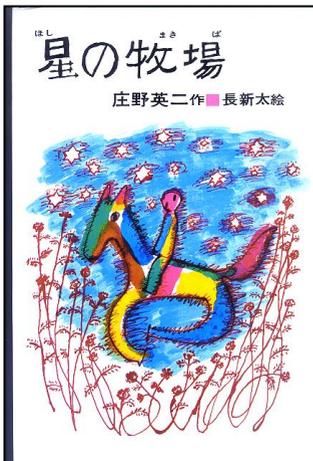


放課後の時間割

岡田 淳

偕成社 1990年

図工の先生に命を救われたねずみは、この学校でたった1匹生き残った「学校ねずみ」でした。2本足で歩き、教室の天井裏から授業を受け、人間の言葉を話せるようになったねずみです。そのねずみたちの間に語り伝えられてきたお話は、もう伝える相手がいません。そこで先生が最後の聞き手に選ばれたのです。月曜日の放課後に1話づつ語られるお話は、学校にまつわるファンタジーあり、ナンセンスあり。しゃれたお話集としても楽しめます。



星の牧場

庄野英二作 長 新太絵

理論社 1979年

戦争から帰ってきたモミイチ青年は、少し記憶をなくしていました。ただ、牧場で働くようになったモミイチの頭の中では、死んだはずの愛馬ツキシミがひすめの音をたてて走っています。ある日山の奥の草原で、クラリネットをもったジブシーやヴァイオリンを弾く少女に出会い、音楽の世界を知るのです。オーケストラと花にかこまれて、モミイチはツキシミのいなく声を聞きました。やさしさの光が、牧場にふりそそぐような童話です。



ほたる館物語

あさのあつこ作 樹野こずえ画
 ジャイブ カラフル文庫 2004年
 〈新日本出版社 1991年〉

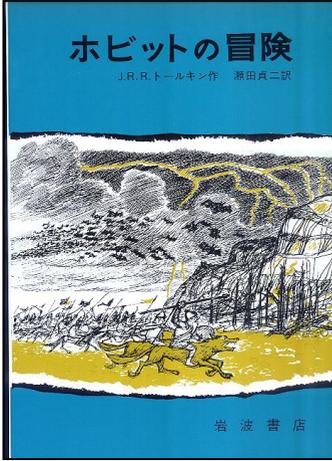
湯里町の旅館ほたる館には、プールもカラオケもありません。でも板長の料理はおいしいし、何よりここで働く人たちは、お客様にいい時を過ごしてもらいたいと心から願っています。ほたる館の娘で小らの一子は元気いっぱい。大人と一緒にお客が減ったのを心配したり、トラブルを解決したりと大活躍です。ベテラン女将のおばあちゃんや、ぐちゃってばかりのおかあさんなど個性豊かな面々の、関西弁での丁々発止のやりとりも楽しめます。ほたる館シリーズは「ゆうれい君と一子」など4巻あります。



ぼっぺん先生と帰らずの沼

船崎克彦作
 筑摩書房 1974年

「この沼におちたものは、2度とうかびあがってこない」といわれる帰らずの沼。この沼の近くで生物学者のぼっぺん先生がお昼を食べていたら、珍しい桃色のウスバカゲロウが飛んできました。つかまえようと追いかけた先生ですが、なんと自分がウスバカゲロウに変身してしまいます。必死で元に戻ろうとしますが、それどころか…。哲学に興味を持ち始めた高学年の期待にも充分答えられる、生き物の営みと生きる意味を描いた1冊です。ぼっぺん先生シリーズは全部で9冊あります。



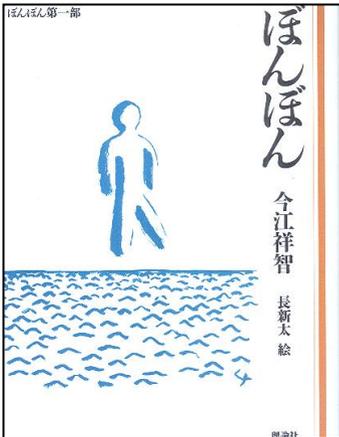
ホビットの冒険

J.R.R.トールキン作 瀬田貞二訳

寺島竜一絵

岩波書店 1965年(作り1937)

ホビット族の小人ビルボは地中の住居で快適な暮らしを楽しんでいました。ところがある日、魔法使いガンダルフが現れ、宝を取り返すために竜退治に行くドワーフ小人たちについて行くことになったのです。しぶしぶ出かけたビルボでしたが、何度も危険な冒険に巻き込まれるうち、次第に自分らしさを発揮するようになり…。神話や伝説もとりこんだ読みごたえのあるファンタジーですが、さらに壮大な「指輪物語」の序章ともなっています。



ほんぼん

今江祥智作 長新太絵

理論社 1973年

大阪の商家のほんぼんとして何不自由なく過ごしていた洋が小学2年の時、太平洋戦争が始まります。音楽好きだった兄が軍国少年になっていくのにとまどいながら、洋は自分なりの考えや感受性を育てて成長します。好きな女の子もできます。でも6年生の3月、大阪大空襲がそんな暮らしを一挙に破壊してしまいました。客観的に描かれた戦況や当時の生活が興味深く、ぐんぐん読めてしまいます。あの戦争を知るにはもってこいの1冊です。



町かどのジム

エリノア・ファージョン作 松岡享子訳

エドワード・アーディゾーニ絵

童話館出版 2001年(作'1934)

(学習研究社 1965年)

町かどのポストのわきに置いたミカン箱に、ジムはいつもにこにこ座っていました。白い髪、ふしくれた手、つやつやとした茶色の顔にきらきら輝く目。むかし船乗りだったというジムの話を聞くのがデリー少年は大好きでした。緑色の子ネコや波に酔ったタラの話、なでてもらいたがった大海へびの話など、ジムが語る途方もない冒険談の数々は、作者の豊かな想像力にあふれています。ジムの温かい人柄や、少年との友情も魅力的です。



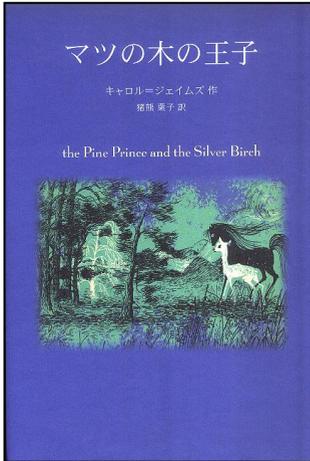
マチルダはちいさな大天才

ロアルド・ダール作 宮下嶺夫訳

クエンティン・ブレイク絵

評論社 1991年(ア'1988)

マチルダは4才にしてディケンズを愛読する天才少女です。でも、金儲けとテレビに夢中な両親はマチルダには無関心で、賢い我が子をうるさがる始末。学校では独裁者のような校長が、子どもを虫けらのように扱っています。担任のミス・ハニーだけがマチルダの理解者です。マチルダは、両親と校長に猛然と反撃を開始します。冷静に毅然と立ち向かうマチルダの姿は痛快。子どもの視点に立った辛辣でブラックユーモアに満ちたお話です。



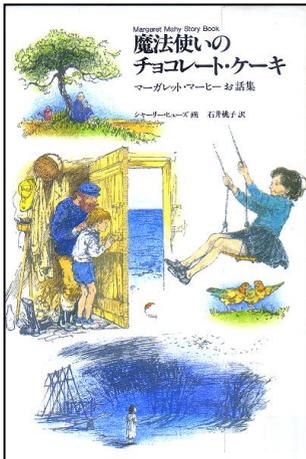
マツの木の王子

キャロル=ジェイムズ作 猪熊葉子訳

セビン=ウネル画

フェリシモ出版 1999年(貸) 1964)

大きな林の中にあるマツの木の王国。マツの王子は、隣に1本生え出たシラカバの少女が好きになります。でも、林の中でいっしょにいることは許されません。やがて、2人はきこりに運び出され、彫り物師のおじいさんの手で木彫りのウマとシカに生まれ変わります。2人の見かけや置かれた状況がどんなに変わっても、いっしょにいる幸せを感じているマツの王子とシラカバの少女。植物を主人公にしながら、静かな深い愛をつたえる物語です。



魔法使いのチョコレートケーキ

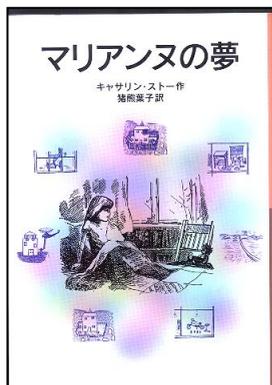
マーガレット・マーヒーお話集

マーガレット・マーヒー作 石井桃子訳

シャーリー・ヒューズ画

福音館書店 1984年(貸) 1972)

魔法が苦手なひとりぼっちの魔法使いは、得意なチョコレートケーキを作り子供たちを招待しますが、だれも来てくれません。仕方なくりんごの木にケーキをごちそうしているうちに…すてきな結末が待っている表題作。他にも犬がほしい少年やブランコに乗れない少女に起こる不思議な魔法のお話がいっぱい。夢や願いを叶えてくれる8編の童話と2編の詩が入っています。お話の名手マーヒーが何とも魅力的な魔法の世界へ案内してくれます。



マリアンヌの夢

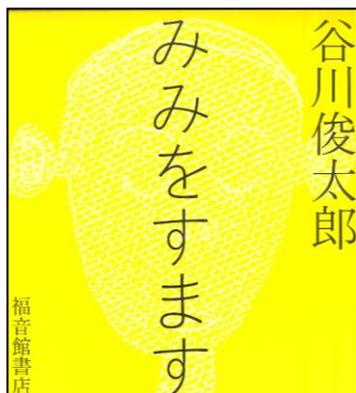
キャサリン・ストー作 猪熊葉子訳

マージョリー・アン・ウォッツ絵

岩波書店 2001年(作) 1958)

(富山房 1977年)

待ちこがれていた10歳の誕生日を迎えたマリアンヌは、突然病気になる、長い間ベッドで過ごすこととなります。ある日見つけた不思議な鉛筆で家を描くと、その家が夢の中に現れ、そこで病気のために歩けない少年と出会います。現実と夢の世界の行き来をくり返し、自分が描いた怪物に追いつめられます。そんな中で2人は灯台を目指して恐怖の家から脱出しようとし、心の中に潜む恐怖から抜け出すための扉を開いてくれる本です。

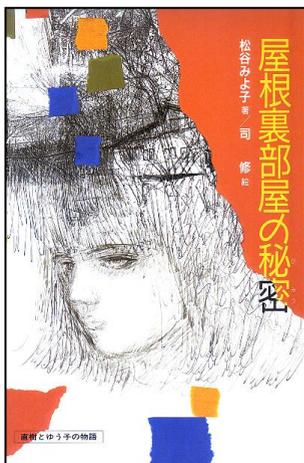


みみをすます

谷川俊太郎 柳生弦一郎絵

福音館書店 1982年

本当の音って、いったい何でしょう。聞こえているようで、実は何も聞いていないのかもかもしれません。子どもたちに向かって書かれたこの詩集は、ひらがなだけで、まるで音を探っているようです。昨日の雨だれ、そうりのぺたぺた、死んでゆく恐竜のうめき。リズムもよく、愉快的言葉が眼を覚まします。忘れてしまった音の隙間に、生きていることの本当の意味を知ることができるでしょう。新しい自分に出会える詩が、全部で6編あります。

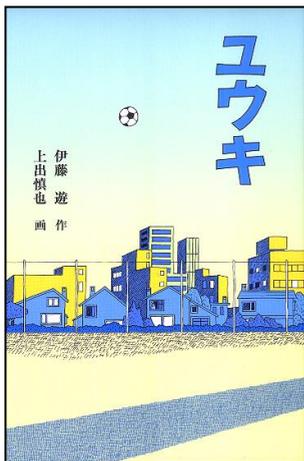


屋根裏部屋の秘密

松谷みよ子 司修絵

偕成社 1988年

ゆう子は、軍医だったエリコの祖父の遺言の謎をとくために、夏休みに花姫の山荘に行きます。開かずの屋根裏部屋の鍵を探し出し、やっと開けたと思ったら、中にあった段ボール箱が盗まれてしまいました。ゆう子は兄の直樹に応援をたのむことにします。ゆう子にだけ姿を見せる中国人らしい謎の美少女や、夢に現れる大陸の荒涼とした光景…。ミステリー仕立てで、読者をぐんぐん引き込みながら、次第に明かされる重大な秘密とは？「ふたりのイーダ」にはじまるシリーズの4作目。大人にもぜひ読んでもらいたい、事実に裏付けられた衝撃の物語です。



ユウキ

伊藤遊 上出慎也画

福音館書店 2003年

ケイタが仲良くなった転校生の名前はいつもユウキでした。1年生の頃いつも一緒に遊んだ祐基。マシンの魅力を教えてくれた4年生までの親友も悠樹。そして去年転校してきた勇毅とは、かけがえのないサッカー仲間になったばかりでした。いつもケイタに思い出と痛みを残して転校してしまうユウキたち。そして6年生になったケイタのクラスに、また転校生が…。転校という大事件。それを乗り越え成長していくケイタたちがさわやかです。



妖精ディックのたたかい

キャサリン・M・ブリッグス作

山内玲子訳

岩波書店 1987年(作'訳1955)

家つき妖精のディックは、屋敷に隠された宝を守って何百年もの間、田舎の地主屋敷に住みついています。しかし、長年の住人であった一族が没落して去ると、そのあとに越して来たのは町の商人一家。妖精など信じない主人夫婦と、古いしきたりを守る土地の人々の暮らしぶりと騒動が、伝承の世界を織り込んで生き生きと描かれています。屋敷に住む若い2人の恋の行方や、宝とディックの運命など読者をひきつける要素もたっぷりです。



ルーシーのぼうけん

キャサリン・ストア作 山本まつよ訳

阪西明子絵

子ども文庫の会 1967年(作'訳1961)

3人姉妹の末っ子ルーシーは男の子になりたがっていました。男の子ならほんとのけんかやすごい冒険ができるのです。ある日、男の子たちから、泥棒をつかまえたら探偵ごっこに入れてやると言われ、ルーシーは、「事件」を探します。そして、偶然、本物の泥棒を見つけ…。子どもらしいルーシーの気持ちが生き生きと描かれ、特に、後半は、ひとりで犯人を追跡するルーシーのどきどきする心臓の鼓動までもが聞こえてくるようです。

「ルーシーの家出」もあります。